

## 裴崢名誉教授記念号の刊行にあたって

学長 和田 健 夫

裴崢 (Pei, zheng) 先生は、1977年1月に中国四川大学外国語学部日本語学科をご卒業後、湖北省外事弁公室で地方政府間の日中友好促進に係わるお仕事をされ、1980年9月に北京外国語大学大学院現代日本語研究科に進学し日本語研究の道に入られました。1982年7月に同修士課程修了後、1982年9月から1986年5月まで中国人民警官大学の日本語専任講師として教壇に立たれましたが、在任中に、札幌大学で研究生として留学したことが契機となり、1987年4月、人民警官大学を辞して北海道大学大学院教育学研究科に入学、日本語研究を再開されました。5年間の研究を経て、1992年4月に、本学言語センター助教授として赴任、1998年10月同教授になられ、2015年3月に定年退職されました。定年後2年間の特任教授期間を含め、25年の長きにわたり、本学の教育研究や大学運営に多大の貢献をなされました。

裴崢先生は、北海道大学において、中国人の日本語学習者を対象とした日本の文学作品の指導方法、とくに作品中の或る表現を取り上げて学習者に課題を設定し、課題の取組を通じて表現の意味、文脈の繋がりを吟味し文学作品を理解させる「表現課題方式」の研究に取り組みられました。1995年には「表現課題による日本文学作品の読みの指導に関する研究」で北海道大学から博士（教育学）の学位を取得されました。この分野での研究業績として、「蜜柑のぬくもり－芥川龍之介の『蜜柑』について－」教授学の探究（北海道大学教育学部）6号1988年、「井伏鱒二の『鯉』、『山椒魚』の作品分析－エンプソンの理論にもとづいて－」教育学部紀要（北海道大学）56号1991年、「『蜜柑』をどう教えるか」人文研究87輯1994年、「『鯉』をどう読むか」同94輯1997年、「『鯉』をどう教えるか」同95輯1998年などがあります。

本学にて中国語担当教員として赴任してからは、裴先生の研究は、この課題方式を、日本人学習者への中国語教育の場面に応用することに広がっていきました。2000年4月から2002年3月まで、第二外国語教授法研究のために米国ウィリアム&メアリー大学に在外研究をされました。この間の成果は、「私にとってのアメリカ」緑丘（小樽商科大学同窓会報）93号2003年、「米国の日本語教育を見て」*Language Studies*（言語センター広報）12号2004年などに報告されています。そして、2016年には、中国語教授方法の教育研究の集大成として、一連の教科書『中国語の香り1』、『同2』、『同 講読編』を出版されました。

教育の面では、裴先生は、本学で「中国語Ⅰ～Ⅲ」、「上級外国語Ⅰ～Ⅳ」、「中国語上級Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ」、「言語文化論」、「外国語コミュニケーション」を担当されました。先生の授業は人気を集め、多くの学生が教えを受けました。本記念号に掲載の寄稿「楽しかったことに感謝を込めて、ありし日々を想いを込めて」のなかで、先生は、学生とともに授業を作り、学生が言語を学ぶことに楽しみを覚えるような講義を心がけたと述べておられます。また、言語の背景にある文化やものの考え方を踏まえた視点の重要性を指摘されておられます。それは、本国にあって激動の時代を生き抜き、日中交流の現場を体験された先生の言語教育哲学ともいうべきものです。

2017年1月19日、裴崢先生の最終講義が行われました。講義のテーマは、「学習者は教育現場の主役－語学教育に携わって－」でした。文字通り、学習者の立場に立った言語教育を貫いた先生の最後の言葉となりました。

個人的には、2009年9月に、本学の協定大学である中国蘭州大学の創立百周年記念式典に出席した際、同行した先生から、途中立ち寄った北京の街を案内して頂き、市井の人々の豊かな暮らしぶりを見て感動したことを懐かしく思い出します。長年の功績に感謝申し上げるとともに、先生のご健勝とご発展をお祈りいたします。